



6:25 その夜、主はギデオンに仰せられた。「あなたの父の雄牛、七歳の第二の雄牛を取り、あなたの父が持っているバルルの祭壇を取りこわし、そのそばのアシェラ像を切り倒せ。

6:26 そのとりでの頂上に、あなたの神、主のために石を積んで祭壇を築け。あの第二の雄牛を取り、切り倒したアシェラ像の木で全焼のいけにえをささげよ。」

6:27 そこで、ギデオンは、自分のしもべの中から十人を引き連れて、主が言われたとおりにした。彼は父の家の者や、町の人々を恐れたので、昼間それをせず、夜それを行った。

6:28 町の人々が翌朝早く起きて見ると、バルルの祭壇は取りこわされ、そのそばにあったアシェラ像は切り倒され、新しく築かれた祭壇の上には、第二の雄牛がささげられていた。

6:29 そこで、彼らは互いに言った。「だれがこういうことをしたのだらう。」それから、彼らは調べて、尋ね回り、「ヨアシュの子ギデオンがこれをしたのだ」と言った。

6:30 ついで、町の人々はヨアシュに言った。「あなたの息子を引っ張り出して殺しなさい。あなたはバルルの祭壇を取りこわし、そばにあったアシェラ像も切り倒したのだ。」

6:31 すると、ヨアシュは自分に向かってたっているすべての者に言った。「あなたがたは、バルルのために争っているのか。それとも、彼を救おうとするのか。バルルのために争う者は、朝までに殺されてしまう。もしバルルが神であるなら、自分の祭壇が取りこわされたのだから、自分で争えばよいのだ。」

6:32 こうして、その日、ギデオンはエルバルと呼ばれた。自分の祭壇が取りこわされたのだから「バルルは自分で争えばよい」という意味である。

ギデオンは必ずしも勇者の性質をそなえているわけではありませんでした。偶像を切り倒すのに、人を恐れて夜にそれを行うような、気の弱い面があったのです。できれば自分がやったとは知られたくなかったでしょう。しかしそれが知れ渡ってしまいました。

主はご自身の力が明らかになるために、あえて弱い人間を用いることが多いようです。自分は弱いから主のためには何もできないのだという言い訳は通用しません。

主が第一に求められるのは、弱い者が強くなるということではなく、その人自らのきよさです。ギデオンの家には偶像があったので、主はそれを処分するように命じられたのです。私たちは主に願いますし、そのためには自分を用いてくださいと願うこともあるでしょう。そのときは何よりも、罪から離れてきよくされることが必要です。罪ある者を用いるなら、それは主の聖であられることに傷がつくことになります。

結局ギデオンは隠れていることができず、表に立ってしまいましたし、それによって31節からのような威勢のいい言葉までも発しました。私たちももしかしたら、成り行きで引込みがなくなかって、大胆な信仰の行いへと導かれることもあるかもしれません。主の栄光につながることであり、それは良いことであり、主が最後まで支えてくださいます。ギデオンのように前進しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

